

不登校児の母親の養育態度に影響を与える要因

21010FRM 濱口 真

キーワード：不登校，母親，養育態度

I 問題と目的

我が国では、長らく不登校の原因論が研究されてきた過去があり、その中で不登校児の母親を対象に研究が行われてきた。不登校児の母親の研究を整理した板橋・佐野(2004)によれば、1960年代から1980年代までは、親の養育態度や母子関係について、1990年代以降からは親の変化過程についての論文がみられるようになったと述べている。親の変化過程では、内田(1992)、小野(1993)、川中(1998)など、母親の心理変容プロセスに着目した研究が行われている。また、栗原(1998)は、子どもの不登校を「喪失体験」として捉え、喪失(不登校)の受容プロセスについて報告している。これらの研究に共通しているのは、子どもの不登校と並行して、母親の不登校に対する価値観や認識が変化していくということである。また、母親の不登校への価値観や認識が変化することで、子どもへの接し方にも変化が現れ、子どもの状態に変化が現れるとしている。

しかし、これまでの先行研究では、母親の心理変容過程を中心としており、母親の養育態度が不登校の子どもに影響を与えることは副次的に関係性が示唆されているに留まっている。

そこで本研究では、不登校経験を持つ子どもの母親を対象に面接調査を実施し、不登校以前、不登校期間、不登校後から現在に至るまでの養育態度の変化とその諸要因についての検討及び母親の養育態度が不登校児に与える影響について検討することを目的とする。特に、子どもの不登校経験前から現在までの母親自身の養育態度や、夫の子育て参加、支援機関利用の有無、学校の対応など、母親を取り巻いていた環境が、母親の養育態度にどのように影響を与えるのかについて検討を行う。養育態度に影響を与える要因を明らかにすることで、不登校の子ども、だけでなく母親

支援の一助となることが期待される。なお、本研究は愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科の倫理委員会の承認を得て実施された。

II 方法

(1) 分析対象

A 県の私立中学校の親の会に所属する母親約200名を対象に不登校経験の有無、現在の子どもの状況、面接調査への協力の有無について事前調査を行った(有効回答91名)その中で、子どもが不登校経験がある、現在の子どもの状況として就学している回答し、かつ面接調査に同意した11名を対象に面接調査を行った。

(2) 調査手続き

アンケートによる予備調査は2022年10月に行い、面接調査は2022年11月～2023年1月にかけて行った。面接調査はZoomオンラインを用いて個別に半構造化面接調査を実施した。面接時間は約60分から90分であった。

(3) 質問項目

面接では、①子どもの不登校時期・期間、②不登校～現在に至るまでの過程、③不登校以前、不登校後の子どもとの関わり方、④不登校以前、不登校後の気持ちや考え、⑤子どもが不登校中の状況・家庭内外の環境について質問を行った。

(4) 分析方法

面接データはM-GTA(木下,2007)に基づいて分析した。

III 結果

本論文の中では、分析の小単位である概念を[], 概念を包括するカテゴリーを<>, さらにこのカテゴリーを包括するコアカテゴリーを【 】で表記する。MGT-Aで分析した結果、44の概念、14のカテゴリー、4つのコアカテゴリーが生成され

た。概念、カテゴリー、コアカテゴリーの関連を Figure 1 に示す。コアカテゴリー間の関係では、

【子どもの状態】は【母親の心理的状态】に影響を与え、【母親の心理状態】が【母親の養育態度・行動】に影響を与えることが示唆された。

最初に、〈登校渋り・不登校状態〉の子どもの影響を受けた母親は〈不登校への否定的な気持ちや考え〉が芽生え、〈学校に行ってほしい気持ち〉から〈登校刺激〉を行う。しかし、登校刺激は〈子どもの状態の悪化〉につながり。このとき、〈非協力的な父親〉も〈子どもの状態の悪化〉に影響を与える。〈子どもの状態の悪化〉を受けて、母親は〈専門機関の利用・相談〉するになり、次第に〈不登校の容認〉へ至る。〈不登校の容認〉後、母親はこれまでの〈母親本位な関わりの振り返り〉をする。また、子どもの不登校をきっかけに出会った〈不登校経験者の存在〉との交流も、〈母親本位な関わり〉方の反省と〈子どもを尊重する関わり〉に影響を与える。専門機関の助言や不登校経験者との関わり、日頃の子どもの関わりを通して、母親の養育態度は〈子どもを尊重する関わり〉へと変化した。〈子どもを尊重する関わり〉

は、〈子どもの状態の好転〉に影響を与え、子どもの変化を通して〈子どもを尊重する関わり〉を強化していく。協力的な父親の存在は、母親の養育態度や特定の心理的状态に影響を与えないが、母親の心理的負担を減らす役割を担うことが示された。

IV 考察

結果より、母親の養育態度には専門機関や不登校経験者の存在、子どもの状態が影響を与えることが明らかとなった。不登校経験者の存在が母親の心理状態（母親本位な関わりの振り返り）と母親の養育態度に影響を与えたことについては、不登校の自助グループについて研究を行った菊池（2009）の、「不登校の親の会の参加によって不登校に対する理解の仕方や、同じ境遇の親たちと情報を共有することで既存の価値観（規範的価値観）を緩和させ、新しい価値観を肯定していく」という指摘と一致するものとなった。また、肥田・大久保（2006）は「子どもが学校に行かないことを容認した後に徐々に子どもが明るくなった」と報告を行ったが、実際には不登校の容認後に起こ

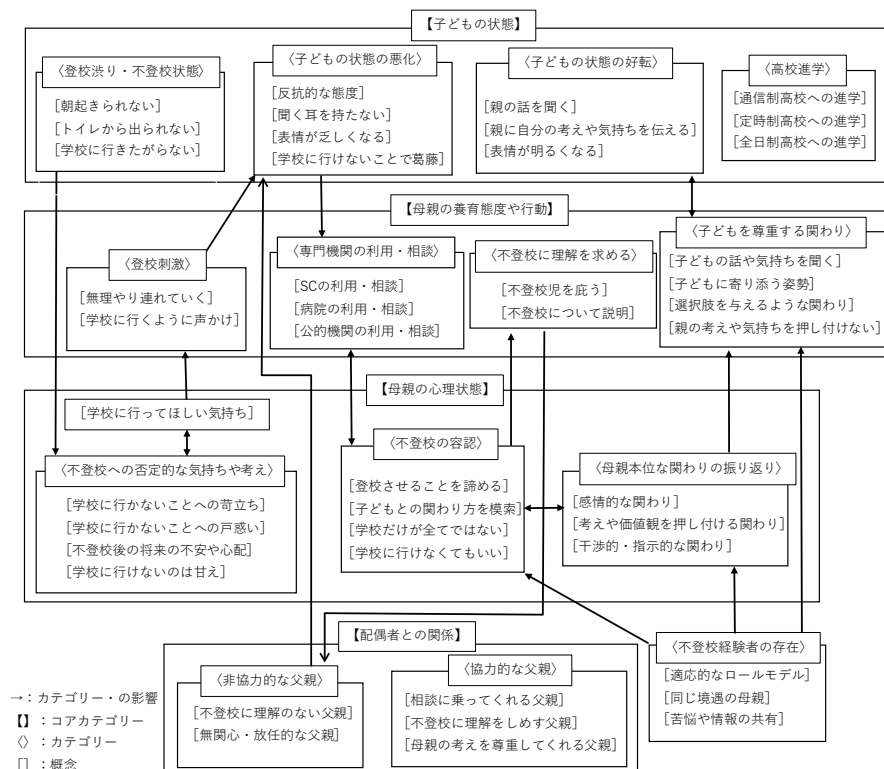


Figure 1 不登校経験者をした子どもを持つ母親の養育態度の変化とその諸要因

る子どもを尊重する関わりによって、子どもが明るくなったという子どもの状態の好転が見られたものだと考えられる。配偶者との関係については、母親に対して特定の概念・カテゴリー上では特定の影響を与えていないが、協力的な父親の特徴から、「不登校を克服する過程において父親は間接的なケアラーとして家族内で位置づけられ、主要なケアラーたる母親へのケアに従事していた」（青田，2015）ことが考えられる。